HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ニコライ・バルチェスクにおける「ネーション」と「農奴解放」の問題
Author(s)	萩原, 直; Hagiwara, Tadashi
Citation	スラヴ研究, 6, 43-64
Issue Date	1962
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4961
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113169.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ニコライ・バルチェスクにおける「ネーション」と「農奴解放」の問題

萩　原　　直

1

近年，ソヴェトおよび東欧社会主義諸国の一部の歴史家のあいだで，「東欧史」という歴史概念についての吟味や，あるいはある「東欧史」概念を前提とした研究が進められている．例えば東欧における封建制の性格，東欧の再版農奴制等々についての研究である．そのばあい，当然のことながらどの時代にも適用される一つの「東欧史」概念というものは存在しないのであり，またある一定の時代についても史家の立場により，異る「東欧史」が想定されることもありえよう．

われわれの問題とする19世紀前半について見るならば，東欧にはロシア，オーストリー，トルコの三帝国が多民族国家として存在していた．これにプロシアも加えうるだろう．他方，これら強国の支配下にあった諸小民族は，強国による支配，搾取という点ですでにある共通な歴史的条件下にあった．またそのために根強く残存していた封建制度が19世紀前半にはその危機に達し，市民社会への移行の問題が主要な課題とされていた点でも，かれらのあいだに相似的な歴史的諸条件が存在した．しかしながら強国による支配の過程あるいは方法は多様であり，とりわけ南東欧の小民族の歴史はトルコ封建制の特性の故に，また社会経済的発展段階の差により，バルチック海からカルパチア山脈にいたる地域のそれとは異る歴史諸条件をも有している．また同じくトルコ支配下にありながら，トルコの宗主権のみが認められていたルーマニアの歴史事情は，例えばギリシヤやブルガリアのそれとは異ったものをもっていた．

かかる複雑な構造をもつ東欧――慣習的な意味で――の歴史を統一的に理解せんとした一つの試論として，ニーデルハウゼル・エミールの好論文「東欧における農奴解放と民族問題」[1]が挙げられる．かれの主たる研究対象はカルパチア山脈以北に向けられ，ルーマニア史には余り触れてないが，かれによれば，19世紀前半の東欧の諸小民族の発展は二つの基本的課題をもたらした．民族独立の問題と農奴制の廃止とである．しかしこの二つの課題の完全な実現は，市民革命と民族独立戦争の両問題が結合し，そしてこの両課題に向って，ある民族の全社会階級が同時に整列する時にのみ達成されるが，現実の歴史ではそれが不可能であったとし，両課題の結合，不一致の関係を，19世紀前半から60年代までの社会的，民族的運動の史的追求によって解明しようとした．かれの統一的把握の方法自体について，[2]またかれの設定せる「東欧史」の領域について問題

1）Niederhauser Emil. A jobbágyfelszabaclítás és a nemzetiségi kérdés Kelet-Európában. Történelmi Szemle. 1958/ 1－2.

2）Századok. 1957. nr. 5－6. 所収の上記ニーデルハウゼルの論文に関する討論．とくに Pach Zsigmond Pál の発言参照．

は残されているが，しかし「東欧史」研究に関心を抱く者にとって，かれの試論は傾聴に価すると考えられる．

本稿はルーマニアの革命的民主主義者，N・バルチェスク[3]の思想において，上の二つの基本的問題がどのような関係をもち，それぞれがどのような位置を占めたかを跡づけようとしたものであるが，単にバルチェスクという一思想家を扱った研究ノートにすぎない．

2

バルチェスクの革命家としての活動は，ディミトリエ・フィリペスクによって組織された革命的団体への参加にはじまる．1840年，この組織は弾圧され，参加者は8～10年の刑に罰せられた．かれらが新しい制度をうち立て，農奴をボエーリの桎梏から解放してかれらに土地を与え，また共和制の樹立を目論んだのが，その理由であったといわれている．バルチェスクは，年少者のゆえに，3年の刑をかせられ，マルヂネニ修道院に送られた．1843年2月，出獄したバルチェスクは，直ちに友人イオン・ギカ，クリスチャン・テルとともに，イタリアの炭焼党の組織にならった秘密結社「友愛」をつくり，来るべき革命の準備をはじめた．1848年の革命家の大部分が，この「友愛」に参加，あるいは関係した．[1]

以上の事実から，かれの革命思想は，すでに40年代のはじめに形成されていたのではないか，と推測されるが，当時のかれの思想の内容について詳細に知りうる史料はとぼしい．したがって，かれの思想内容の検討は44年以降に発表されたかれの諸論文を主たる手がかりとするほかはない．

バルチェスクの処女論文は，1844年に雑誌「進歩」に発表された「ヴアラヒア侯国の建国より現代にいたるまでの軍事力と軍事技術」であった．当時のある書評は，「この著者によって，わが国はその真の歴史家をもつことになるであろう」と記している．[2] 1846年には，モルドヴァの史家ミハイル・コガルニチャヌの要請により，前者の補論として，「国力強大なりし時代のモルドヴァにおける軍事力と軍事技術」を発表した．

かれが処女論文に，ほかならぬ軍事史を選んだ動機としては，かれの軍隊生活が挙げられよう．Règlement organique により創立され，はじめてボエーリ，ブルジョアの子

3）バルチエスクの伝記および思想一般については
Gh. Georgescu-Buzăn. N. Bălcesu. Bucureşti. 1956. I. Tóth-Zoltán. Bălcescu Miklós élete. Budapest. 1958. Фцлософская энциклопедия. Том. I. Moc. 1960 стр. 216-217. 等
革命的民主主義者としての規定については
M. Roller. Despre N. Bălcescu. Studii şi Referate despre N. Bălcescu. vol. I. 1953. 所収
C. I. Gulian. Giudirea social-politică a lui N. Bălcescu. Bucureşti. 1954.
M. Ioanid. Particularităţile ideolologiei democrat-revoluţionare din Romînia. Cercetări filozofice. 1958. nr. 1.
Gh. Haupt. Despre N. Bălcescu ţi cercurile revoluţionar-democratice din Rusia. Studii. Revistă de istorie. 1952. nr. 4 等を参照

1）Gh. Georgescu-Buzăn. N. Bălcescu Bucureşti. 1956. pp. 59-69

2）N. Bălcescu. Opere. vol. I. Ed. Academia R.P.R. Bucureşti. 1953. p. 361

弟の共学が行なわれ，革命的思想の揺籃となった聖サヴァ校を卒業するや，かれは国民軍に入った．フランス留学を断念してかかる経歴を選んだ動機については明確ではないが，しかし，たんに家庭の経済事情のみによるものではなかった，とされている．[3] Règlement organique により新設された国民軍は，バルチェスク自身が述べているように，不完全であるにせよ，独立への一歩をなすものであった．その士官生活中，すでに軍事史研究を始めていたバルチェスクは，自ら兵隊の思想教育を行なおうとし，上官と意見の対立をおこした，といわれている．[4]

しかし，以上の経歴は，かれの初期の論文作成の一契機を説明しているとしても，かれの研究意図とその内容は十分には説明されえない．

それにはまず，かれの歴史研究自体，19世紀前半のルーマニアにおけるネーションの自覚を基盤としていた点を指摘する必要があろう．ルーマニアにおけるネーションの自覚とその運動は18世紀のアルデアル学派の活動に負うとバルチェスク自身述べているが，[5] トウドール・ウラジミレスクによって指揮された国民的蜂起は，かれに，より決定的な影響を与えた．

「トウドールの蜂起はネーションの覚醒であった．その時から，ナショナルな党が結成されはじめたし，それ以来，国に生命のしるしを示しはじめた．」[6]

かれにとって，歴史はかかる思想的基盤に立つものであるとともに，かかる国民的覚醒を喚起させるためのものであった．なぜなら，「歴史はあるネーションの最初にもつべき書である．……歴史をもたぬネーションはは未だ野蛮な人民であり，その宗教を忘れた人民は何とあわれなことか．ダキアの三州に住むわれわれルーマニア人はそのような状態にある．」[7] からである．

また，かれの意図する歴史について，次のように述べている．「真のネーションの歴史はわれわれに欠けている．それは未だ，年代記や当代諸史料のほこりの下にうずもれている．今まで，一人としてそれを掘出そうと試みた者はなかった．歴史叙述に従事した人びとは，みな支配者の伝記をしか，われわれに伝えなかった．誰一人として，過去の社会制度，思想，感情，風俗，商業および知的文化を，正確に，われわれに伝えなかった．」[8]

すでに30年代から，モルドヴァ侯国では，コガルニチヤヌが西欧での修学の後，新史学の建設に従事してはいたが，上記の如きバルチェスクの史学的立場は，当時のルーマニア知識人一般にふかい影響を与えたものである．そしてかかるネーションの自覚を基盤として，かれの軍事史研究も行なわれた．

「他のいかなる歴史よりも，私は軍事制度の研究を選んだ．それは，この制度がわれわれの先祖の有したもっとも素晴しい制度だからであり，また，それが4世紀にわたっ

3） C. I. Gulian. Gîndirea rocial-politică a lui N. Bălcescu. Bucureşti. 1954. p. 27.
4） Gh. Georgescu-Buzăn. N. Bălcescu. Bucureşti. 1956. p. 57.
5） N. Bălcescu. Opere. vol. I. Bucureşti. 1953. p. 309, 331.
6） Ibidem. vol. I p. 325.
7） Ibidem. vol. I p. 53.
8） Ibidem. vol. I p. 7.

て，わが国の範図と力とをうみ出したからであり，最後に，ルーマニア人の国家が，いつの日か，ヨーロッパ諸人民のあいだで，それに相応しい地位をかち取るならば，それはわれわれの先祖が有した，かっての軍事制度の再生に負うであろうことを確信しているからである．[9]

では，かれのいう過去の光栄ある時代の軍事制度はいかなるものであったか．これに関するかれの説は，現在ではとられないが，われわれの関心は，その史実的当否にあるのではないから，ここで旧説をとりあげることも許されよう．

かれによれば，ルーマニア軍隊はヨーロッパで最初の常備軍であった．14世紀，まだヨーロッパには，Comune と称する歩兵隊をはじめとする軍隊組織が存しなかった頃，すでにルーマニアでは，ラドウ黒侯によって，あらゆる軍事制度の基礎がきずかれていた．その制度の原則は，1）常備軍，2）警察，3）予備軍の併存にあり，この予備軍の利用と国民の道徳的力によって科学的戦術を用いることができた．ミルチヤ老侯やミハイ勇敢侯らの，トルコ軍にたいする輝やかしい勝利も，すべてかかる軍事制度の優秀性に基いていた．[10]

しかし，この制度はファナリオート支配の確立とともに廃止される．「1716年2月10日はルーマニア人にとって凶日であった．」[11] それから一世紀をへたのち，Règlement organique が施行せらるにおよんで，ようやく，軍隊，警察，予備軍の三制度が復活されたのである．

ところで，当時としては豊富な史料を駆使しての史的叙述につづいて，かれの軍隊制度改革案が示される．かれによれば「基本的原則は，すでに Règlement organique によって承認された．それを，ただ，よりよく適用すべきである．」[12] かれはヨーロッパ諸国の軍隊制度を比較，検討したうえ，プロシアの軍隊制度（Land wehr制度）を最良，かつルーマニアに適用可能のものとして，それにならい，次の改革案を提起した．すなわち 1）常備軍の縮少，2）20歳～60歳の国民皆兵制度など．

バルチェスクの叙述のかかる実践的態度――その際，上記改革が当時の政治体制の枠内で考えられいること，常備軍の縮少は財政的見地からの配慮であり，すこぶる現実的な案として提出されていることは注目に値する――から，来るべき革命における軍事力の重視というかれの見解を汲取ることができるであろう．

かれが「ルーマニア侯国の運命は，戦争をその構成要素とするすべての国の運命と同様に，軍隊の運命に密着していた．」[13]というとき，あるいは「たとえ二流国であろうとも，適当な時に，秤に重みをかけるすべを知るならば，その国は政治の秤で決定権をもつことも可能である」[14] と述べるとき，かれのイメージにあったのはトルコの大軍を撃破する昔のルーマニア諸侯の勇姿であったと，想像される．

9）Ibidem. vol. I p. 8.
10）Ibidem. vol. I p. 12.
11）Ibidem. vol. I p. 32.
12）Ibidem. vol. I p. 39.
13）Ibidem.
14）Ibidem. vol. I. p. 41.

1845年以降，バルチェスクは「ダキアのための歴史雑誌」の編集者となり，歴史を通して啓蒙家の活動をつづけるが，かれ自身も自分の論文を同誌に発表した．48年以前における，かれの主要論文の一つである「各時期のルーマニア侯国における農耕労働者の社会的状態について」も1846年に同誌に発表された．ここで，かれの第二の主要テーマである農奴解放の問題に触れたい．

19世紀前半のルーマニアでは，封建制の危機の深化とともに，農奴解放の問題が中心的な社会問題となった．バルチェスクの参加した，1840年に結成の革命団体は，その綱領に賦役農民の解放を，かれらの耕作地の分与を掲げていたし，1843年の革命組織「友愛」も賦役農民にたいする有償土地分与を重要な綱領としていた．したがって40年代初頭から，バルチェスクがこの問題に非常な関心をよせ，研究したことは疑いえない．

ところで，上記論文は，はじめて，ルーマニアの農奴制の全時期についての史的展望を試みた点で，またその徹底せる農奴制批判の思想的立場によって，ルーマニア史学史上の記念碑的著述であると同時に，当時の農奴制に関する論議にたいしても画期的意義をもっていた．1840年代に，D・フォティノ，ディニク・ゴレスク等が農奴制史について述べているが，その統一的展望を提供するにはいたらなかった．[15] バルチェスクは「多くの国民間に存する農耕労働者の状態の差異は所有を規制する諸制度にその原因をもつ」[16] としてルーマニア農奴制史の理論的把握を試みた．かれが従服と植民という二概念によって，土地所有形態の差を説明しようとした試みは現在では顧られぬとしても，例えばミハイ勇敢侯の土地緊縛令やコンスタンチン・マヴロコルダートの「農奴解放」についてくだした解釈はすぐれた史的分析であるとともに，またかれの農奴解放にたいする立場を理論的にするものであった．マヴロコルダートの「農奴解放」について，それによって農民の状態は少しも改善されなかったこと，農奴制は賦役の結果であり，身分的解放のみをもってしては土地所有者と農奴の関係は変化しないことを指摘しているが，[17] 農民の土地に対する要求を正当とするかれの立場の，これは最初の理論的表現であった．

1848年革命の前夜，若い革命家たちのあいだでは，農奴解放の方法に関する議論が激しく行なわれたが，バルチェスクは当時の歴史的条件のもとで，土地にたいする農民の所有権の主張の擁護が，封建的土地所有の崩壊を正当化する唯一の原則であるとし，また買戻しによる農民への土地分与の立場をとった．はじめ多くのモルドヴァの革命家たちは無償土地分与を主張し，それは1848年5月24日，ブラショフで宣言された「祖国改れ革のための原則」に採択されたが，後に，国家による代償による土地分与と改められた．[18] ルーマニア侯国の革命家たちのあいだでは，ユートピア社会主義の流れをくんで，私的所有一般の廃止を要求するC・A・ロセッティなどがいたが，イズラズ宣言では，バルチェスクの主張がとりいれられている．[19]

15) Texte din literatura economică în Romînia. Sec. XIX. vol. I. București. 1960. XV.
16) N. Bălcercu. Opre. vol. I. București. 1953. p. 135.
17) Ibidem. vol. I. p. 141.
18) N. Bălcescu. Opere. Ed. de Zane. Tom. I. Part. II. p. 243.
19) V. lonescu. Contribuții la studiul gîndirii economice a lui Nicolae Bălcescu. București. 1956. p. 101.

つぎに，かかる農奴解放にたいする理論的展望を与えるにあたってかれが「人民」についての明確な概念をもち，それから出発した点に注意する必要がある．

すでに1832年に，コガルニチャヌは社会問題の根本的な解決における人民大衆の役割を強調して，それをあらゆる運動の源泉であり，それを欠いては支配者も無に等しい，と述べているが，バルチェスクは人民の革命的役割を更に強調した．[20] バルチェスクにあっては，人民はボエーリ階級に対立するもの，農民と同一視された．この規定は，かれの農奴制史研究における階級的視角を導き，例えば，農奴土地緊縛令にたいする鋭い分析を生んでいる．

「その時，つまりミハイ勇敢公以来，国は敵対する二つの陣営に分かれ，それぞれ相対立する利害をもつようになった．その時以来，人民は諸侯やボエーリの声に何も感じぬようになり，自分らに何の権利をも与えなかった祖国のために，また自分らに何の喜びをももたらさぬ自由のために犠牲をはらうのを望まなくなり，国は上昇のかわりに急速に，下降の道をたどった．」[21]

さらに，この規定は，ボエーリはルーマニア人に非ず，農民のみがルーマニア人であるとして，農民のみが現在の祖国の悲惨な状態を救いうるという，かれの農民革命論を導きだす．

「ボエーリは自分たちの周囲を見まわし，腐敗，堕落した人間だけを見，それに失望して叫んだ，『どこにミルチャ，ヴラドゥ・ツェペシュ，ラドゥおよびミハイの勇者どもがいるのか』と．かれらは下の方，はるか下の方を，かれらの足許を苦しげに動き，怠け者の主人を養うために働いている人民を見ない．かれらは，かの勇者どもも，みなこの人民の中から現われたこと，人民がかくもしばしばわが国を救済したこと，さらにかれらに呼掛けて国の状態に関心をもたせ，諸権利を与え，また守るべき祖国を与えたならば，再びわが国を救済するであろうことを考えなかった．」[22]

1848年の革命以前のバルチェスクの思想の根抵にナショナルな問題意識が存したことは上に述べたが，かれの農奴制史研究，あるいは農奴解放論も，かかる観点からとりあげられた．そして初期のバルチェスクにおいて，軍事力の増強と農奴解放がナショナルな問題を解決するための前提条件と考えられていた，といえるであろう．

ここで，かれのこのような思想が革命をとおして，どう変化したかについての検討に移るのであるが，その前に，かれのナショナルな問題意識について，いま一度ふり返ってみたい．それは統一の問題に関してである．

ルーマニア史を他の東欧諸国の歴史との比較においてみようとするばあい，ルーマニアがその封建国家形成の時以来，三つの部分に分かれてそれぞれ独自の発展をしたこと，そしてルーマニア侯国とモルドヴァ侯国の統一は，1859年にようやく実現されたという特殊条件を忘れてはならない．このために，ルーマニアではナショナルな問題はまず統一の問題としてあらわれた．1848年に先立つ20年間に，統一を望む運動は非常な

20) Texte din literatura economică în Romînia. Sec. XIX. vol. I. București. 1960. XV.
21) N. Bălcescu. Opere. vol. I. București. 1953. p. 140
22) A. Oțetea. Unirea Principatelor. (Studii privind Unirea Priucipatelor. București. 1960. p. 21)

高まりを示した．1834年ルーマニアを訪れたあるフランスの外交官は，統一への強い希望が全社会階層に認められるとして，「両侯国を統一して一つの強大なダキアをつくることは，何ら特殊な要求の表現ではないように思えた．」と述べている．[22] バルチェスクが少年時代から，「生命のイデー，救済のイデーのシンボル，統一のシンボル」としてのミハイ勇敢侯に，ひとかたならぬ傾倒を示したのも，当時のかかる思潮を反映していたといえるだろう．[23] 革命前夜に，両侯国の革命家たちが互に連絡をとった事実も明らかにされている．[24]

では，何故1848年以前に統一の問題が革命のプログラムにあらわれなかったのだろうか．

後年，バルチェスクはトランシルヴァニアとの関係についてであるが，次のように述べている．

「ルーマニア侯国の1848年の革命家たちは，アルデアルのルーマニア人の例にならわねばならないが，政治的事情のために最初からナショナルな統一の問題を綱領に入れることはできない，と考えていたが，しかし一時も，ルーマニア人全体を結ぶ連帯義務を忘れはしなかった……」[25]

この見解を布衍して，最近の一研究者は「戦術的配慮から，侯国における革命の公式の綱領は，自治――古い諸条件の意味において――と民主的，ブルジョア的諸制度に基く国家の組織というイデーに制限せられた．」と記し，また，イオン・ギカの解釈を引用している．すなわち，「第一に，オーストリー・ハンガリー政府およびルーマニア侯国，モルドヴァ侯国の総督の下らぬ絶対主義という諸事情は，この問題について討議し，世論がある結果に到達するのを許さなかったために，統一については語られなかった．またこれとは別に，ルーマニア人の大部分がそれに従属していた両帝国（オーストリーとトルコ）が未だ強力であった当時にあっては，ルーマニア人にとって，かれらの統一の原則を宣言するのは多分危険であったろう．」[26]

統一が革命のプログラムにあらわれなかった理由が，以上のような政治的あるいは戦術的な説明によって十分であるかどうか疑問であるが，ここでは1848年以前において統一が革命のプログラムにあらわれなかったこと，それが1848年以前のバルチェスクの革命思想の特色をもなしていた点を指摘しておく．

3

1848年のルーマニア侯国の革命および1849年のトランシルヴァニア革命への参加は，バルチェスクにどのような体験を与え，またそれ以後の思想的発展にどんな影響をおよぼしたのだろうか．

---

23) N. Bălcescu. Opere. vol. I. Bucureşti. 1953. p. 219.

24) C. C. Bodea. Lupta pentru unire a revoluţionarilor exilaţi de la 1848 (Studii privind Unirea Principatelor, Bucureşti. 1960. p. 126)

25) N. Bălcescu. Opere. vol. I. Bucureşti. 1953. p. 335.

26) C. C. Bodea. Ibidem. p. 126.

「失敗に終った革命の苦い経験の後，バルチェスクは以前よりも，よりふかい洞察をもち，より批判的に人びとを判断し，社会的．政治的諸現象についてのよりふかい解釈を知り，さらに未来の革命のための組織活動をより烈しく行った．」[1] といわれるが，その思想内容の発展あるいは質的変化にかんして，革命後のかれの思想は革命前のそれとどのような関連をもつのか，が明らかにされねばならない．そのために，かれが革命をどのようにうけとり，その失敗からどんな結論をえたかについて，次に簡単に述べたい．

1846年，亡命を余儀なくせられたバルチェスクはパリーに赴く．[2] 1848年2月革命がおきるや，三日間パリー市街を歩きまわり，フランス人とともにマニフエストを行った．パリー在住のルーマニアの若き革命家たちの組織も会合をかさね，本国の革命の準備について討論し，三月には革命プログラムが作成された．革命の焔がウイーンにまでおよんだのを見たバルチェスクは，やがて少数民族の手により全オーストリーに革命がひろがり，その波はルーマニア侯国にも達するであろうと予測し，革命の準備のため帰国し，とくにプラホヴァ地方の農民蜂起のため奔走する．[3] イズラズにおける革命宣言．革命臨時政府の成立．7月16日，かれは革命の成功について，その感激を次のように記している．

「わが首都の市民は，お世辞ぬきに，ヨーロッパのすべての民族を，パリー市民をさえも凌駕したといえる．」[4]

しかし，また同じ手紙の中で，かれは次のように書かざるをえなかった．「われわれの力はブカレストでは強い．なぜなら人民，とくに6月30日以後多くの働きをした商人たちがわれわれと一緒だからだ．首都の外へは委員を派遣して村々での工作をはじめた．都市のあいだでは，まだ多数の反動がいる．」[5]

さらに革命指導部の内部にも対立が顕著となった．革命臨時政府は，イズラズ宣言において農奴解放と農民への土地分与を約しながら，バルチェスク等の意見を無視して，それを早急に実施することをせず，8月9日にひらかれた土地所有委員会も10回の会合を行なっただけで，延期してしまった．しかも農奴解放のもっとも徹底的な主張者であったバルチェスクは，修道院領問題の解決のためという理由でコンスタンチノーポリへ派遣され，上記の委員会に参加できなかった．「私はこの役目から逃れようとしたが，修道院その他の問題についてかの地で議論できるのは私しかいなかったため，それができなかった．」「革命は賦役と年貢の廃止のために行なわれた」[6] のであるのに，それを実施しない革命臨時政府は，農民からの支持を時のたつに従い失っていった．

1） C. I. Gulian. Gîndirea social-politică a lui N. Bălcescu. București 1954. p. 45.

2） G. Zane. Aspecte noi ale vieții lui N. Bălcesen în luminaunor documente inedite. "Studii Revistă de istorie" 1960. nr. 1.

3） Gh. Georgescu-Buzăn. Activitatea lui N. Bălcescu pentru pregătirea dezlănțuirii revoluției din 1848. "Studii. Revistă de istorie." 1956. nr. 1.

4） I. Ghica. Amintiri din pribegea după 1848. vol. I. p. 50.

5） Ibidem. p. 51.

6） N. Bălcescu. Opere. vol. I. București. 1953. p. 327.

農奴解放の問題をめぐって，かれは臨時政府を痛烈に批判するようになる．イズラズ宣言13条の実施延期に関する法令について「これはわれわれの敵の手中に勝利の果実を与えることを意味する．この法令に署名するのを欲しなかったのは，多分私一人であったろう．」[7]と．

また，「1848年革命は人民のための革命であったが，人民によって行なわれた革命ではなかった．……その原因は政府にあった．われわれは政府が弱体であったことを証言せねばならない．」[8]といい，さらに「もし行動的な政府があったならば，1848年のわれわれの政府のもちえた資力でもって，国全体を革命化することも可能であったろう．」[9]と述べている．

さらに革命臨時政府の弱体を一層明白に示したのは，武装準備つまり解放戦争の準備の問題についてであった．後年バルチェスクは三つの革命の規定を行なった際，次の如く述べている．

「1848年革命はルーマニア人に，ただかれらの人間として，市民としての諸権利の回復を求めしめ，ネーションとしての諸権利の回復を求めなかった．この点，革命はアドリアノーポリ条約および1834年の勅令によって再確認せられた周知の，昔の降伏条約をトルコがまもることを要求するにとどまった．1848年革命はトルコにたいしても，ロシアにたいしても反対するのではなかった．なぜなら新しい権利を宣言せず，旧条約の遵守を要求するのに限定されたのだから．」[10]

「ルーマニア人はこれらの強国を信頼して，かれらが条約の神聖をまもり，そして自治の諸権利によって行なわれた諸法令の改正を否定しえないであろう，と考えていた．」[11]

これは革命の規定として，また1848年革命の正当性を主張する意図においては正しかったといえるであろうが，実際には革命の過程に，上の規定をこえる解放戦争への萌芽があった，といえる．

革命臨時政府はその成立後，直ちにイオン・ギカを通して革命臨時政府をルーマニア侯国の正式の政府として承認するようスルタンとの交渉を開始した．しかし同時に反革命派（ボエーリ，大商人等）がコンスタンチノーポリにあったN・アリスタルキを通してその妨害を図ったため，交渉は難行した．革命政府の掌握せる武力は全く不十分であった．7月16日付のギカへの手紙で，バルチェスクは「われわれの防禦の望みは，ただトランシルヴァニアの軍隊にのみかけられているが，これも非常に弱い．わが国は武器もなく，軍隊もない．軍隊は完全に士気沮喪しているのだ」と報じている．[12]しかしスルタンとの交渉が難行するのを見たバルチェスクは，武装準備を主張し，また政府に農民の外国軍隊にたいする恐怖心をとりのぞよくうに処置することを説いた．かれはまた作戦プランを自ら作成してC・テルに送っている．政府は無為に時を見過ごした．革命

7） N. Bălcescu. ESPLA. 1952. p. 234.
8） N. Bălcescu. Opere. vol. I. București. 1953. p. 327.
9） M. Roller. Proleme de istorie. Bucureți. 1951. p. 138
10） N. Bălcescu. Opere. vol. I. București. 1953. p. 310
11） Ibidem. p. 311.
12） I. Ghica. Amiutiri din pribegea. vol. I. p. 52.

の三カ月に，政府は一挺の小銃も，一人の兵士をも増やしはしなかった．しかし，ブカレスト市民の革命性をパリー市民のそれにまさると前に述べたバルチェスクは，人民の決起の「奇蹟」を最後まで期待していた，といわれる．[13]

かかる革命の危機的な進行のなかで，バルチェスクは注目すべき小論文「ルーマニアのトルコ政府にたいする諸権利」を書いた．これは1393年と1460年の条約を史的根拠として，ルーマニアの自治権を主張するものである．すなわち，

「われわれのトルコとの条約によれば，また国際法によれば，さらに露土間の諸条約によってさえも，ルーマニア人民は常にその主権（dreptul suveran）を保持しつづけた．スルタンのわが国にたいする権利は，ただわれわれが毎年支払うべき義務を有する一定額の貢納と宗主権（dreptul de supremaţie）つまり国の選ばれた総督を強化し，またより強大な国と見做される権利にのみ存するのであり，国事に関して命令する権利はもたない．」[14]

この解釈に基いて，かれは人民にたいしてかれらの権利を守るために革命の防衛に立上るよう訴えた．

「兄弟であるルーマニア人よ，これがわれわれのもっている権利である．われらの先祖はこれをわれわれに伝えるために貴い血を流した．われらの義務は，それと同じだけの権利を子孫のために維持することである．まだ完全な独立をかちとる秋は到来していない．われわれの政治的状態は，条約によれば，まだ良好である．ただそれがトルコ政府によってまもられ，絶えずわれわれによって支持されねばならない．必要とあらば，われわれの血を流してでも，ナショナリティとわれらの権利を守る義務を負うていることを忘れてはならない．もしこの聖戦に倒れるなら，われらの先祖と同じく，少くとも男らしく倒れよう．そしてかれらに倣い，こう叫ぼう：わが国が広大な墓場と化してもかまわない，もしすべてがルーマニア人の国として残りさえするならば！」[15]

しかしバルチェスクの期待した「奇蹟」はおきなかった．革命政府の指導部は何ら武装の準備をしなかったし，また農奴解放の実施を拒んだため，農民はすでに革命政府から離れていた．また当然英仏両政府は革命を自己に有利に利用しようとし，英国は革命の発展に反対する動きをみせていた．[16] かかる状況下で，バルチェスクの主張は，ブカレスト消防夫の立上り，一部農民の武装準備などが見られたにせよ，孤立していた．

1848年のルーマニア侯国の革命の崩壊の後，革命指導者の大部分はパリーあるいはコンスタンチノーポリに亡命し，パリーでは革命組織の再建がはじめられた．しかしバルチェスクはハンガリー革命軍がシビウ市を占領するや，「トランシルヴァニアとバナートのルーマニア人の運動を調べる」目的でトランシルヴァニアへ赴いた．[17] かれは「かの地のルーマニア人から何を期待できるかを，自分の眼で見るまでは」革命を断念して

13) Gh. Georgescu-Buzăn. N. Bălcescu. p. 190.
14) N. Bălcescu. Opere. Bucureşti. 1953. vol. I. p. 230.
15) Ibidem. p. 230.
16) Н. В. Березняков. Революционное и нацнонально-освободительное движение в Дунайских княжествах в 1848-1849. 22. Кишинев. 1955. стр. 115-116
17) I. Ghica. Amintiri din pribegea. vol. II. p. 4.

パリーでの亡命生活をはじめることはできなかった．ハンガリー革命が成功すれば，ルーマニア侯国へも革命軍を送れるのではないかとの希望を抱いていた．

当時のトランシルヴァニアの状態は複雑をきわめている．かれの筆を借りれば，「バナートでも，トランシルヴァニアでも，ルーマニア人はハンガリー人にたいして勢をなして立上り，完全に，かつ永久に，ハンガリーから自分たちを断ちきった．不幸は，ルーマニア人の運動が，ハンガリー人がルーマニア人の地主であり，またかれらにナショナリティを拒否したためにおこったのであるから正当でありながら，それがオーストリー皇帝の反動に利したことである．さらに，かの地の運動の指導をしているルーマニア人委員会が，完全に，トランシルヴァニア・オーストリー軍の指揮下にあり，大体その目的に応じて動かされている．」[18] バルチェスクはかかる状態を救うために，トランシルヴァニアをルーマニアの国として組織するための国民議会の結成をすすめた．[19] しかし，トランシルヴァニア・オーストリー軍はその案を承諾しながら，バナートとトランシルヴァニアと各々別個の議会を結成させようとし，事実上，この案を不成功に終らしめた．

バルチェスクの感情は動揺する．「ああ！ナショナリティの感情が，何と多くの不幸をこの地（トランシルヴァニア）にもたらしたことか！ ハンガリー人とルーマニア人のあいだの戦いは野蛮な戦いだ．それは中世にも見られなかったほどのものだ．ルーマニア人にとって有利な点は，すべてが立上り，多数の若者がネーションを指導して評判もよく，またかれらが戦闘の仕方と戦争を怖れぬことを学んだ点である．」[20] また，「勇敢なハンガリー人とかれらの興奮を見，そしてわれわれルーマニア人の凋落を今まで果してきた愚かな役割を考えると，わが胸は裂ける思いだ．自分のナショナルな愛を傷ける以上の屈辱はない．」[21]

すでに革命の初期から，一部のルーマニア人はハンガリー革命軍に参加し闘っていたが，バルチェスクは西方山脈に立てこもっていたルーマニアのアブラム・ヤンク軍とハンガリーとの和解のために努力し，自らも指揮官としてルーマニア人の部隊を編成し，ハンガリア革命軍に参加する意志を示したが，クロアチア人の反抗によって苦渋を体験したコシュートは少数民族の運動に懐疑的であり，その民族政策をあやまる．[22] バルチェスクはこれにたいし，ハンガリーは貴族的，専制的にとどまるか，あるいは自由と民主を求めるかの二つの道しかないこと，そして後者を望むなら900万のルーマニア人と手を握らねばならない，と批判している．[23]

かれはアブラム・ヤンク軍の勇戦を聞いては，「も一度，いや一度だけでなく何度もハンガリー人を破ってほしい．そうすれば今われわれのやっている協定の締結が容易にな

18) Ibidem. p. 4.
19) Din istoria Transilvaniei. vol. II. Bucureşti 1961. p. 98.
20) I. Ghica. Amintiri din pribegea. vol. II. p. 5.
21) Ibidem. p. 27.
22) I. Tóth Zoltán. The nationality problem in Hungary in 1848-1849. Acta Historica. Tom. IV. Fasc. 1-3. Budapest. 1955. 参照
23) I. Ghica. Amintiri din pribegea. vol. II. pp. 106-107.

るだろうから.」[24] と述べ，またベム軍のヤンク軍攻撃の計画を知って，「私は微妙な立場にある．私はルーマニア人を愛す，そしてかれらが消滅されるのはしのびない．自由を愛する者はすべてハンガリー人を支持せねばならぬと思う．かれらは武器を取ってロシアおよびその同盟者である専制者にたいして戦っている唯一の人民なのだ．それに，私の願っている協定はますますむづかしくなっていく.」[25] と書いている．

かかる錯綜せる状況下で，バルチェスクは強力な軍隊の必要を一層痛感するようになる．

「民衆の力が，組織された国家にとって唯一の保証である．私の政治上の神は，ずっと以前から，力であり，軍神エホバであった．ルーマニア人のあいだにこの思想を普及させ，かつそのナショナルな全目的を軍隊にのみむけさせる必要がある．なぜなら，それによってのみ，かれらは救われ，また偉大に，強力になるであろうから.」[26] この問題に関して，すでに1848年に顕在化したかれと他の革命家たち——バルチェスクの評言によれば「ロマン派」——とのあいだの対立は，ここで一層明白に表明された．

政治家は熱中してはならぬ，理性の計算にしたがって判断すべきだ．と考えるかれは，刻々の革命情勢の変化に応じて，いかにそれをルーマニア侯国の革命という目的に有利に導くかについて考察する．コシュートとバルチェスクの歩みよりは1849年7月14日に締結された同盟の協定となって実現された．ルーマニア，ハンガリー両国人民の関係史上重要な意義をもつこの協定は，和解の草案とルーマニア人部隊創設に関する協定の二部からなっていた.[27] 歓喜せるバルチェスクは，ベム軍がロシア軍をピストリッツァで破り，やがてムンテニアへ進撃するであろうこと，またコシュートがヤンクの率いる全軍をムンテニア攻撃に使用するのを提案したことをイオン・ギカに報じている.[28]

しかしこの協定の締結はすでに時機を逸していた．ハンガリー革命はまもなく崩壊する．しかし，トランシルヴァニアにおける活動の体験はかれの革命観および民族問題にたいする考えに深い痕跡を残し，かれの革命後の思想形成に影響を与えたと考えられる．

4

1848～9年革命以後のバルチェスクの著作はかれの思想的成熟を示している．革命後のかれの思索は1848～9年革命の正当性の問題とこれに関連するルーマニア社会史の法則的把握，および次に来るべき革命の性格規定という二つのテーマに集約せられる．

革命当時，あるいはその直後，革命は一部の考えのない若者，あるいは共産主義者によってなされたという批判が行なわれたが，これにたいしてかれは革命の正当性を主張した．

「いかなる革命もこの革命より正当，より必要ではなかった．日々のパン，所有，安

24) Ibidem. p. 38.
25) Ibidem. p. 48.
26) Ibidem. pp. 107-108.
27) Din istoria Transilvaniei. vol. II. Bucureşti. 1961. pp. 119-122
28) I. Ghica. Amintiri din pribegea. vol. II. 115.

全，あらゆる種類の自由と保証，産業，商業，法と公平をもたず，そして違法と濫用によって生活し，道徳と人間性を軽蔑し，国を自己の利益のために搾取している専制的で，臆病で，無能で堕落しかつ掠奪的な小数の官僚の犠牲にされていたルーマニア人民は，何をなすべきだったか.……この革命は偉大であり，美しく，また貴重であった.」[1]

また，「1848年のルーマニア革命は不規則的な，偶然的な，過去も未来もなく，また一小民族の気紛れな意志あるいはヨーロッパの一般的運動以外に原因のないものではなかった．一般革命は一つの機会であったが，しかしそれがルーマニア革命の原因ではなかった.」[2] と述べているが，かれにとって1848年のルーマニア革命は，ルーマニア人が18世紀にわたって耐えてきた歴史的苦悩の当然の帰結であると考えられ，同時に，それはかれ自身の1840年頃以降の活動と思想の発展としての意義をもつものであると考えられたのである．

つぎに，革命以後のかれの思想内容の検討にあたって，はじめに「ネーション」の問題を取上げたい．49年以後，かれはよりしばしば，「ネーション」について語るようになる．これはかれの思想発展において，どんな意味をもっていたのだろうか．

かれは革命の失敗の経験により，国内の自由は外国による支配からの解放なしには保証されえないことを学んだが，これはかれの思想にある変化を生ぜしめる．「ネーション」の問題がかれの思想において占めるべき地位について，かれは次のように述べている．

「自分にとって，ナショナリティ問題は自由よりも上に置かれる．一人民がネーションとして存在しない限り，自由をもって何をなしえよう．自由は，それを失うことがあっても，容易に再び獲得できるが，ナショナリティはそうはいかない．したがって私は，わが国の現在の状態において，われわれのナショナリティの保持を，それが脅やかされればされるほど，より多く志し，そしてわれわれのナショナリティの発展のために必要な限りにおいて自由を要求すべきだ，と思う.」[3]

では，かれのいうナショナリティとは何であったか．かれは言語，宗教，感情の同一性，地理的位置，過去，最後に保存されまた自由になる必要，を挙げている.[4] 1849年のトランシルヴァニア滞在中，かれはかの地のルーマニア人を知り，共に革命のために活動したが，そのような体験もかれの「ネーション」への考えに影響を与えたであろう．かれはティサ河から黒海まで，カルパチア山脈からバルカン山脈にいたるまでの各地方で，ルーマニア人が多数を占めているのを目撃し，東欧において，ルーマニア人がネーションとしてもっとも美しい将来をもっている，と考えた.[5]「パンルーマニア主義は，現在われわれの活動の共通の目的であるべきだ．これによって，われわれの革命のシンテーザは完成される.」[6]

1） N. Bălcescu. Opere. vol. I. Bucureşti. 1953. pp. 298-299.
2） Ibidem. p. 307.
3） I. Ghica. Amintiri din pribegea. vol. II. p. 11.
4） N. Bălcescu. Opere. vol. I. Bucureşti. 1953. p. 311
5） I. Ghica. Amintiri din pribegea. vol. II. p. 107.
6） N. Bălcescu. Opere. vol. I. Bucureşti 1953. p. 311.

しかし，かれのナショナリティの主張は東欧の各民族の共存を原則とするものである．ハンガリー主義，マホメット主義はパンルーマニア主義と共存するであろうと考えられた．[7] また複雑な民族問題をはらむトランシルヴァニア問題については，少数民族のナショナリティは尊敬さるべきことを主張し，その理由として，「所有する土地に生活する権利は神聖だからである．この自然的権利はあらゆる歴史的権利に優越する．なぜなら，土地は人間のものであり，人間が土地に従属するのではないから．」[8] といっている．

このように，かれのナショナルな問題にたいする思想は深化され，多様化されたが，それが来るべき革命のプランにおいては統一の問題に集中せられた．

5

すでに指摘しておいた如く，統一の問題は1848年以前には革命のプランの次元においては論じられなかった．革命以後，統一が革命家たちのあいだで激しく論じられるようになった一つの契機が革命の失敗とそれへの反省にあったことは容易に推測されよう．

「一緒に活動しなかったために，互いに理解しあわずまた『ナショナルな統一と自由を要求する』とともに叫びながら同時に立上ることをしなかったために，われわれの断続的，孤立的な弱い叫び声は打消され，あるいは他の方向へ向けられ，そしてわがネーションの敵はわが祖国の聖なる地を汚した．」[1]

かかる反省はルーマニア侯国の革命家だけでなく，モルドヴア侯国の革命家によっても行なわれた．[2]

1849年12月，バルチェスクは新しい著述のプランをイオン・ギカに伝えている．それによれば，第二章「未来への道は何か」において，

(1) ナショナルな目的がもっとも主要であり，それよりナショナルな統一の問題，また国内的，国外的な生命と力の問題が生じる，それにより人類におけるわれわれの使命を達成することができる．この点について，何が実行可能であるか．差当り，両侯国の統一等．

(2) 社会的目的．それは所有の問題に帰結する．それとの関連で，貢租，信用および信用組織の問題が生じる．

(3) 政治的目的．あるいは国内の組織の形態あるいは個人的自由と権利，人民の主権 …… [3]

が述べられる予定であったが，ここに，すでにかれの革命後の思想の骨組が構成されているのを知る．統一は実現可能な当面の課題，ナショナルな自由をかちとるための第一条件とされ，このナショナルな統一がルーマニアの独立の保証となるであろうと考えら

7) N. Bălcescu. ESPLA. 1952. pp. 228-9

1) P. P. Panaitescu. Contribuţii la o biografie a lui N. Bălcescu. Bucureşti. 1924. p. 103.

2) C. C. Bodea. Lupta pentru unire a revoluţionarilor exilaţi de la 1848. p. 129

3) I. Ghica. Amintiri din pribegea. vol. II. p. 171.

れた．革命後の国内的，国際的情勢の発展によって，統一への諸条件が生まれたと考えたが故に，かれは，「ルーマニア人の二つの大きなグループが相並んで立つ時，誰がかれらの統一を妨げえようか．われらのルーマニアは将来存在するだろう．私はふかい確信をもっている．それを見ない人間は盲である．」[4] と断言できたのであろう．

それでは，1848～9年革命に続く時期において，ルーマニアの統一は如何にして可能であっただろうか．

まずかれは，かれの唱える新しい時代の統一が，過去のそれと異ることを指摘する．過去における統一は両侯国の何れかの側からによる征服的性格をもつものであったが，現代の統一は，人民のナショナルな自覚を基盤とするものでなければならぬ．「われわれはモラルの統一を望む．全ルーマニア人がその必要性を感じ，それを欲するように望む．かかる統一のみが永遠である．」[5]

このために，かれは人民の啓蒙の必要を説く．かれの統一のイデーが，最後まで下からの人民の力によって実現されるという志向を失わなかった点は強調さるべきであろう．

「かのわれわれのもっとも偉大なりしボエボード達がかれらの勇気をもってしてもなしえなかったことを，武装し，また一つの原則によって強化された人民はなしとげるであろう．」[6]

しかし同時に，ルーマニアの統一がルーマニア人民の手によってのみ成就されるとは考えられなかった．1848～9年革命の体験は，かれの国際政治的要因にたいする洞察をふかめた．革命の最中に，かれは「立上り，結束しようとする諸ネーションの願望を阻止することに，ヨーロッパの全政府が諒解しあったのは，もはや疑う余地がない．」[7] ことを認識し，他方，「一国の自由では十分でない．多くのネーションがナショナルな自由を欲している．[8]」ことを確信する．

革命後も，以前の専制主義がヨーロッパの多くの人民を抑圧しているのを見て，かれはナショナルな自由が宮廷からは与え切れないこと，それはルーマニア人の強固な統一，ルーマニア人すべての同時的蜂起および被抑圧諸民族との連帯からのみ期待されるとした．[9] かれはトルコの善意を高く評価する友人ギカの見解に反対した．

「トルコに君のいうことをやらせ給え，つまりわが侯国を統一させ，憲法を与えなどさせたまえ，そしてそれを私が一歩前進として喜び受取るようにさせたまえ，しかし私はその時，それ以上を望むだろう．しかし私の信じるように，われわれがトルコから見離されており，革命によって自由への道を探さねばならないとするならば，その際，可能た限り役立つものをこの前の革命からひき出し，そして諸政府に頼るのではなく，諸人民に基礎をおく「自然な」同盟を来るべき革命に与えるのはわれわれの義務であ

4） N. Bălcescu. ESPLA. 1952. p. 248.
5） N. Bălcescu. Opere. vol. I. Bucureşti. 1953. p. 327.
6） Ibidem. p. 311.
7） I. Ghica. Amintiri din pribegea. vol. II. p. 21
8） Ibidem. p. 47.
9） N. Bălcescu. Opere. vol. I. Bucureşti. 1953. p. 312.

る.」[10]

1849年10月，パリーに着いて以後のバルチェスクの活動は，主として亡命ルーマニア人の組織，雑誌の発行，著述および外国人亡命者との協力に注がれた．これらの中，未来の革命にたいするかれの考えを理解する上に，特に留意すべきはマッチーニとの関係であろう．

かれは，1850年1月ロンドンに赴き，ルーマニア人，ポーランド人，ハンガリー人，ロシア人，ボヘミア人，モラヴィア人および南スラヴの代表者からなる東欧民主同盟の結成に従事し，これは実現されなかったが，同年6月，ロンドンで「ヨーロッパ民主中央委員会」が結成されるや，これと関係を保った．かれは「委員会」の綱領を正しいとし，とくに近き将来におこると考えられていたヨーロッパの一般革命の点で，マッチーニの線に接近した．[11] またこれと同時に，かれはイオン・ギカから離れ，フランスの社会主義者と交友のふかかったC・A・ロセッティと協力するようになった．

亡命ルーマニア人と上記委員会との関係は，翌年4月，ルーマニア革命家たちの側からの協同の申入れによって，一層緊密になり，5月にはマッチーニなどの「ヨーロッパ連邦規約」に加盟した．6月には，「48年のルーマニア革命委員会」の名において，バルチェスク，N・ゴレスク，C・A・ロセッティの署名で宣言が発表せられた．自由と全ルーマニアの名において祖国の人民にあてられたこの宣言は全ルーマニア人の同時的蜂起を呼掛け，ただそれは革命を準備せる他国民の立上りと同時に行なわるべきことを説き，それまでの相互理解と忍耐を要求している．[12]

しかし1851年の後半から，バルチェスクは病のため組織活動から退き，統一のシンボルたるミハイ勇敢侯時代のルーマニア史の叙述に専念する．したがって，かれの革命思想もほぼその時機までの社会的，政治的諸条件の下で理解されねばならぬであろう．

6

革命前のバルチェスクの著述の中で，軍事史と農奴制史の研究がもっともオリジナルな，かつ中心的位置を占めていたのに対照して，革命後の著述中の傑作――それは同時にルーマニア史学史上の画期的著述でもある――が「ドナウ侯国における経済問題」と「ミハイ勇敢侯時代のルーマニア人の歴史」（未完）であったのは示唆的である．

統一の問題が革命のプログラムの第一に置かれた革命後においても，バルチェスクが農奴解放の問題を第二次的な問題と見做したとはいえない．なぜなら，1848年革命によって，かれは農奴解放が統一（ナショナルな自由）の獲得なしには実現されず，したがって統一が農奴解放に先行せねばならぬことを知り，ナショナルな自由の獲得の後には社会改革は実行可能であると考えるようになったが，しかし，それがかれの農奴解放問題の軽視あるいは放棄を意味しなかったことは，上記「ドナウ侯国における経済問題」が明瞭に示していると考えるからである．

まず，革命後のかれの活動の非常に短い期間に，かれがどのように農奴解放の問題を

10) I. Ghica. Amintiri din pribegea. vol. II. p. 295.
11) C. C. Bodea. Lupta pentru unire a revoluţionarilor exilaţi de la 1848. p. 145.
12) Ibidem. p. 150.

取上げたかを検討するために，該論文の執筆の動機についてみてみよう．

この小冊子は一カ月足らずで書上げられたと伝えられるが，1850年パリーで発行された．かれ自身の語るところによれば，「この著述はとくにフランスの読者にむけられたものではない．実をいえば，ルーマニア侯国の実際の状態について，トルコ政府を啓蒙するための一つの覚え書をなすものである．」[1] 革命後のルーマニア問題処理のため，バルト・リマン条約第3条にしたがい，1849年10月，農業問題に関する委員会が設けられた．これは Règlement organique の改訂をめぐっての委員会であったが，委員の大多数はボエーリによって占められていたため，農民の状態の改善が期待されえぬことは事前に予測された．この委員会の活動を重視したバルチェスクは，この小冊子を取急いで発行し，出版後ただちに友人ギカにそれを送り，トルコ政治家のあいだで読まれるように依頼したのである．[2]

さらにこの小冊子は，1848年7月19日付のロシア政府の覚書が1848年の革命干渉を正当化し，革命は少数の無思慮な者によって行なわれたと述べたのにたいし，革命の正当性を主張せんとする意図をもっていた．そして革命の正当性の主張は，当然革命の中心課題であった農奴解放の正当性の主張でもあった．

革命後も，かれはもっとも徹底せる農奴解放の主唱者であった．そしてあらゆる機会を利用して，かれの農奴解放論の主張を行なった．

本小冊子は，内容的に，二部に分けられる．まずルーマニア経済史の発展段階的叙述の部分の基本的見解は，すでに「各時期におけるルーマニア侯国の農耕労働者の社会的状態について」および「農民への土地分与について」に断片的あるいは未体系化の形で散見せられたものであり，その基調は革命の前後において変っていないといえよう．しかしそれに続く叙述は，1848年革命の農業問題をめぐり，一層具体的なかれの農奴解放論を展開している．

Règlement organique 期の経済状態は，本小冊子においてはじめて詳細かつ鋭利に分析せられた．とくに1829年のアドリアノーポリ条約によるトルコのドナウ侯国にたいする貿易独占権の徹廃は，ルーマニアの小麦輸出を飛躍的に増大せしめるが，それはボエーリの農民にたいする一層苛酷な搾取をよぶ．バルチェスクはこの時期の農民の状態の悪化を適確に叙述し，Règlement organique を，「人民大衆の困窮の憲章」と呼んでいる．[3] 因みに，マルクスはそれを「賦役の法典」と名付けたが，興味あるのは資本論第1巻8章2節のヴァラヒアに関する叙述は，バルチェスクのこの小冊子に関接的にではあるが負うており，またヴァラヒアのボエーリが農民に課した諸義務の表はバルチェスクの計算になる表を元にしている点である．[4]

1） N. Bălcescu. Opere. vol. I. Bucureşti. 1953. p. 373.

2） Ibidem. p. 374

3） Ibidem. p. 264

4） マルクスはヴァラヒアの叙述を行なうにあたって，Elias Régnault. Histoire politique et sociale des Principautés Danubiennes. Paris 1855 を引用しているが，この著にはバルチェスクの「ドナウ侯国の経済問題」から多くの章句が，時折，断りなしに借用されており，そのためバルチェスクを間接的に引用する結果となった。
V. Ionescu. Contribuţii la studiul gîndirii economice a lui Nicolae Bălcescu. Bucureşti. 1956. p.p. 78-79. G. Zane. Marx si Bălcescu. Iaşi. 1927. 参照

さて，かかる農民にたいする搾取の増大が1848年革命を惹起した．つまり「革命の綱領の第13条――農奴解放の宣言――は1848年革命の特殊な，そして基本的な性格を形成した.」[5]のである．

つぎに，革命の綱領の第13条の主張が第一に正当であるか，第二に有効であるか，最後に実現可能であるか，について検討し，それらを肯定する．

第一に，農民への土地分与は，ボエーリが昔も今もいっている如き強奪，かれらの土地の分割ではなく，地代の買戻しによる事実上の所有権の公的な所有権への転換にすぎないのであるから，正当である．[6]

第二に，歴史の示す如く，土地にたいする絶対的独占は一般的な荒廃と飢饉を招来する．土地の適当な配分，各耕地への人口の能率的な配置が国富をうむのであるから，有効である．[7]

第三に，農奴解放の具体的方策については，かれは国家信用機構の整備により買戻しが可能であると主張している．これに関連してイオン・ヨネスクなどは外国資本に頼る方法を提案したが，バルチェスクは「外国人の僕にならぬ方がよい.」[8]との見解を述べている．そしてかれは1848年の土地所有委員会における農民代表の意見に賛成した．農民代表は次のようにいっている．

「われわれの欲する買戻しのための資金は国内に，そして農民の手に十分にある．しかし農民の負担を軽減するため，またとりわけ土地所有者の利益のために，国家によって創設される信用機構の援助をうけたい.」[9]

また分与地の面積の問題について，バルチェスクは自己の意見としての具体的な数字をあげていないが，同委員会における農民代表の要求について述べているところから，かれの立場は明瞭である．

委員会においてネアグ牧師は，農民側の意見をまとめて，次の土地を要求した．

平　地	計14ポゴアーネ（約7ヘクタール）	
湿　地	10	〃
葡萄園	11	〃
山　地	8	〃 [10]

バルチェスクはこれについて，「農民の要求は正しかったし，かれらの本当の必要に基いていた．また上の数字があまりにも多いと思った人たちにたいしては，この農民の要求は，ヴァラヒアよりはるかに土地の少いモルドヴアの農民にたいして，1790年の土地令が認めたものの半分にもみたないことを指摘しておこう.」[11]と述べている．

1848年の上記委員会における農民代表の発言は，当時の農民の要求を赤裸々に表現し

5）N. Bălcescu. Opere. vol. I. Bucureşti. 1953. p. 275.
6）Ibidem. p. 276.
7）Ibidem. p. 277～
8）Ibidem. p. 288.
9）Ibidem. p. 288.
10）Texte din literatura economică în Romînia. Sec. XIX. vol. I. p. 423. 424.
11）N. Bălcescu. Opere. vol. I. Bucureşti. 1953. p. 287.

たものとして記念すべき史料であるが，バルチェスクの農民代表の発言にたいする以上の態度は，かれの農奴解放論の性格を如実に示しているといえよう．

7

以上，バルチェスクの二つの基本的テーマについて跡づけてきたが，それから次の結論をひきだせよう．

とくに19世紀前半のルーマニアに顕著であったルーマニア人のナショナルな覚醒は，常にかれの思想の基調をなしていた．したがって，ルーマニアの真のナショナルな独立はかれの革命思想において窮極の目的をなしていた．

1848年革命の以前においては，農奴解放がナショナルな問題を解決するための前提条件と考えられ，そのためには軍事力の増強が不可欠であるとされた．かれの統一のイデーは，まだかれの革命プランには登場しない．

1848年革命の過程で，かれははじめて革命防衛のための武装せる抵抗を主張するが，そこにかれの社会的進歩（農奴解放）の要求と民族解放戦争の問題の結合の萌芽を見出す．

1848～9年革命以後，かれは統一をナショナルな問題の解決のための前提条件と見做すにいたった．農奴解放の問題が二次的なものと考えられたのでは決してないが，それに統一が先行すべきと考えられた．

1852年，バルチェスクは未来の革命を夢みつつ死んだが，その後のルーマニア史の進行は，とくにクリミア戦争を境に，新しい様相を呈するにいたった．1859年，ルーマニア侯国とモルドヴァ侯国の統一は実現されたが，それはバルチェスクの想定した未来の革命＝ナショナルな革命によるものではなかったし，ほぼその統一の時期に，ルーマニアのブルジョアジーは大地主階級と妥協し，両者の「奇怪な同盟」が成立した．また1864年の農奴解放をめぐる討議において，かっての1848年の革命家たちの多くはそれの成立に反対したのである．

したがって，最後にかれの未来の革命像について検討するのが，かれの革命思想の性格規定にとって不可欠であると思われる．

かれの未来の革命像は，つぎのルーマニア史における革命の発展のイデーに明瞭に表われている．

「1821年の革命は正義を叫び，そしてルーマニア人が自由で平等であり，国家がルーマニア的になることを要求した．それは民主的な革命であった．

1848年の革命は，ルーマニア人が自由となるだけでなく，それなしには自由も平等も虚偽になる，所有者となることを要求した．このために，そのスローガンは社会的進歩の獲得の条件である友愛を加えた．それは社会的革命であった．

未来の革命はもはや，ルーマニア人が自由，平等，土地あるいは資本の所有者になり，ある共通の進歩の事実に結ばれる兄弟であることに制限されえない．それは外からの自由，外国支配下の自由を要求するにとどまらず，統一とナショナルな自由を要求するであろう．そのスローガンは正義・友愛・統一となるであろう．それはナショナルな

革命となるだろう.」[1]

この革命の規定から，かれが「ナショナル」という時，それは「民主的」,「社会的」両概念を包摂するものであり，かれの「ナショナル」な自由とは，同時に「民主的」,「社会的」自由であらねばならない．かれがその生涯の最後まで「革命的」たりえたのもこの点にあったと考えられる．

しかし前述した如く，かれのナショナルな革命はヨーロッパの被抑圧諸民族による一般革命と不可分に考えられていた．かかる「ヨーロッパ民主中央委員会」の革命プランは実現されなかった．1851年12月2日のクーデター，フランスの反動化は多くのルーマニアの革命家たちを幻滅と困乱に陥れた．そのクーデターにもっとも失望したのはほかならぬバルチェスクであった，といわれている．[2] すでにマルスクが批判しているように，「ヨーロッパ民主中央委員会」のプログラムは1848年革命の問題を革命的な道によって解決するものではなかった．[3] バルチェスクの民族解放のイデーの限界もこの点にあったといえよう．

つぎに，かれの農奴解放論についても検討せねばなるまい．すでに述べた如く，革命後のかれの思想によればナショナルな革命が農奴解放に先行さるべきものと考えられた．

「聖なる戦争が外国人の圧迫からネーションを救済し，それの自由と統一が克復される時にのみ，人民の議会，憲法議会は必要な一切の政治的，社会的諸改革を平和裡に実現し，民主制の支配，人民の人民による支配を成立せしめうるであろう.」[4]

したがって，ナショナルな革命の実現性が失われるとともに，かれの農奴解放の実現性も失われざるをえなかった．19世紀後半のルーマニア農業史においては，ブルジョアジーと大地主階級との妥協による，いわゆるプロシヤ型の発展の問題が登場するのである．1848年の革命家たちが，すでに50年代の後半には，西欧資本主義に迎合と譲歩を重ね，ルーマニアの「半永久農業国家」化の諸条件をととのえる．[5]

バルチェスクの農奴解放論自体に，かかる歴史的発展の展望を欠いたという限界を指摘できる．

かれの想定せるルーマニア史の発展段階によれば，その国家，支配階級，人民は次の如く発展する．

Stat domnesc (domn, rob) →Stat boieresc (aristocrat, serf) →Stat fanariot あるいは Stat orașenesc (bürger, proletar) →Stat ciocoiesc (burocrat, posesor) → Stat romînesc あるいは Stat democrat (すべてが proprietar)

チョコイとはファナリオート期に登用された官僚階級であり，のち新大地主階級となり，旧ボエーリの勢力を駆逐する階級を意味する．上の図式で興味あるのは，ファナリオート期を西欧の市民国家に対応させ，C・マヴロコルダートの改革以後の農民をプロレ

1）N. Bălcescu. Opere. vol. I. București. 1953. p. 312.
2）C. C. Bodea. Lupta pentru unire a rovoluționarilor exilați de la 1848. p. 158.
3）Marx, Engels. vol. 7. București. 1960. p. 500-504. ("A treia croniă internațională")
4）N. Bălcescu. Opere. vol. I. București. 1953. p. 312.
5）A. Oțetea. Unirea Principatelor. p. 23.

タールと呼び，そしてファナリオート国家がチョコイの国家へ発展することにより，資本主義の発展にたいする展望を失い，ルーマニア的国家という際，それは農民中心的な国家を意味していることである．これはルーマニア経済の後進性を反映しているものとはいえ，バルチェスクの経済思想の一特色をなすものである．むろん，工業の発展を無視してはいないが，かれによれば，それは農業の改革後に来るものと考えられていた．つまり農奴解放により，分業と資本の利用が適当に行なわれ，生産力が高まれば，剰余の労働力を工業にまわすことができる．工業の発展はまた，一切の富の源泉である農業を助けるであろう，と見做された．[6]

またかれによれば，農奴解放後には，主に自給自足の小農経営と輸出を目的とする大農経営との調和的な発展が行なわれ，小農の土地剝奪は法律によって防止されるだろう，とされた．[7]

かかるかれの見解は，いうまでもなく，農奴の土地にたいする要求の権利を弁護，主張した限りにおいて進歩的役割を果したが，しかしかれの見解の限界をも示すものであった．

かれの想定せる正義・友愛・統一を要求するナショナルな革命は，すでにその実現性を失っていたというべきであろう．すなわち，革命的な道による統一の達成，また民主的な社会問題の解決を意図しながら，1848～9年革命以後の新しい国際的・国内的情勢の変化の故に，両課題の統一的な解決への展望をもちえなかったのではないであろうか．

6） N. Bălcescu. Opere. vol. I. Bucureşti. 1953. p. 279.

7） Ibidem. p. 282.

Николае Бэлческу о национальной независимости и о раскрепощении крестьянства.

Тадаси Хагивара

В первой половине XIX века самыми жгучими и злободневными вопросами для угнетенных народов Восточной Европы были завоевание национальной независимости и освобождение крестьянских масс из-под крепостного ига. Естественно, в зависимости от конкретных исторически сложившихся обстоятельств и степени экономического развития, решение этих задач каждым народом было неодинаковым.

Автор ставит себе целью исследование взаимосвязи этих двух важнейших вопросов в мировоззрении Н. Бэлческу—виднейшего общественного деятеля, революционного демократа Румынии середины XIX века.

До революции 1848 года Н. Бэлческу считал первой задачей революции разрешение социальной проблемы—освобождение крестьянства—опираясь на хорошо организованную армию.

В процессе социальной революции, по мнению Н. Бэлческу, должны созреть условия, необходимые для национально-освободительной борьбы румынского народа.

Как следствие поражения революции концепции Бэлческу претерпели ряд изменений. Теперь для него главной задачей революции является национальный вопрос, и в первую очередь, объединение Валахии и Молдавии. Но Бэлчеку считал, что национальной независимости румынский народ может добиться только в результате возможной общеевропейской революции угнетенных народов. Только после национального освобождения румынский народ может азрешить главную задачу—освобождение крестьянских масс.